

青  
あおおに  
鬼  
ク  
調査  
2

ほく ぶ しょう がっ ころ まも  
北部小学校を守れ!

ノプロプス くら だけんじ  
noprops・黒田研二/原作

なみつみ  
波摘/著

すずらぎ  
鈴羅木かりん/イラスト



**優助**

北部小学校の五年生。

レイカとは幼なじみなので仲が良い。  
オカルト好きのレイカが暴走するのを  
ハラハラしながらもフォローしている。  
心優しい男の子。サッカークラブに  
入っている。

**レイカ**

北部小学校の五年生。

学校一の美少女だが、オカルト好き  
で変わり者のため、友だちは少ない。  
オカルトのことになると周りが見え  
なくなりがちで、よく幼なじみの  
優助を巻きこんでいる。

### 卓郎

東部小学校の五年生。東部小サッカークラブのエース。怪物に遭遇した子どものうちの一人。

### タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人々を助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。

### 美香

東部小学校の五年生。卓郎の幼なじみ。怪物に遭遇した子どものうちの一人。

### たけし

南部小学校の五年生。ひろし、タケルと一緒に行動することが多い。怪物に遭遇した子どものうちの一人。

### ひろし

北部小学校の五年生。学校一の天才少年と言われているが、レイカ同様、変わり者のため友だちは少ないようだ。街外れにある洋館・ジェイルハウスで怪物に遭遇した。

### ハルナ先生



レイカのクラスの担任の先生。現在は廃校になっている碧奥小学校と、タケルの父親が入院していた碧奥医院の二か所である事件に遭遇している。

# 青鬼

あおおに

## クワ調査

怪物調査レポート CASE.2	005
北部小学校の見取り図	006
1 卓郎君と美香ちゃん	008
2 忘れてしまったメモ	028
3 土砂降りと夜の学校	038
4 救難信号	048
5 音楽室から響く音	069
6 ハルナ先生	085
7 待ち伏せ	105
8 優助のスマホ	123
9 暗闇の体育館	139
10 大雨が降る	152
11 青鬼の中にすむモノ	164
12 軽やかな足音	175
青鬼調査レポート	180
北部小学校の見取り図 その2	182

# 怪物調査レポート

北部小学校オカルト調査クラブ  
報告者：レイカ

## 【CASE.2】

8月18日、碧奥市内の洋館——通称「ジェイルハウス」にて、我がクラブはブルーベリー色の怪物と遭遇。

数々のトラップを仕掛け、怪物ホカク作戦を決行するが、失敗。やむを得ず、ブルーベリー色の怪物を討伐。

以下、ブルーベリー色の怪物の死亡時に起きた現象について記載する。

● 死亡した後、青い巨体はドロドロの液体へと変化し、すぐに蒸発。ブルーベリー色の怪物がいた痕跡はなくなりました。

● 液体が蒸発した後、その場には小さな青い虫の死骸が残っていた。怪物との関係性は今のところ不明だが、その体色や出現のタイミングから、なにかしらの関わりがあると報告者（レイカ）は考えている。

※ 回収した青い虫はビンに入れ、北部小学校オカルト調査クラブの部室にて保管している。

# 1 卓郎君と美香ちゃん

サッカーボールが空高く飛ぶ。

真夏の日差しが照りつける北部小学校の校庭。

そこで北部小と東部小のサッカークラブによる交流試合がおこなわれていた。

「よし、ナイスパス！」

敵チームは小学生とは思えない正確な長距離パスを成功させ、ボールは東部小学校のエース

トライカーの足もとに収まる。

わたしは観戦エリアからその少年のことをじつと目で追っていた。

サッカーにあまり詳しくないわたしでも一目でわかるほど、飛び抜けて上手いその少年の名前は卓郎君という。

「卓郎、頑張れーっ！」

わたしのとなりには元気な笑顔を浮かべ、卓郎君を応援する二つ結びの可愛い女の子、美香ちゃんがいる。

わたしは気づかれないように、ふたりのことを観察する。となりの美香ちゃんにそつと視線を向けていると、グラウンドから大きな歓声が上がった。

「どうやら、卓郎君がゴールを決めたようだ。」

同時に試合終了のホイッスルが鳴る。

交流試合はこれにて終了だ。

「……おい、レイカ」

両チームの選手が挨拶を終えた後、恨めしそうな表情で近づいてきた男子がいた。

北部小のサッカークラブに仲の良い男子はひとりしかいない。北部小のエースにして、数日前にジェイルハウスで一緒に怪物を倒した優助だ。

「ん、なにかしら？」

「その……ちよつとくらい、俺のこと応援してくれてもいいんじゃないか……？」

「失礼ね。ちゃんと見てたわよ、試合」

「いや、嘘だ！　なんか相手のエースの男子ばつか見てた！」

「優助……。試合中、わたしのこと見てたわけ？」

ちよつとあきれた様子でそう返すと、優助はぐつと言葉に詰まる。

「い、いや！ そんなにずっとは見えてない！ ただ、相手のエースは女子に声援もらってたし、こつちもレイカが応援してくれないかなーって、ちよつと確認しただけで」

「試合を見にきていた北部小の女子たちはみんな、優助のこと応援してたわよ」

「それは……そうなんだけど」

「はあ、と深くため息をついた優助は、

「そうだな。レイカにそんなものを求めた俺が悪かった」

と、なんだかひどい納得の仕方をした。

「それで、今日はなにをしにきたんだ？ 試合の観戦が目的じゃないんだろ？ 俺は東部小との

交流試合の日時を聞いてきた時から怪しんでたぞ」

「さすが幼なじみ！ わたしに真の目的があることをよく見抜いたわね！」

わたしがそう言うのと、優助は予想を的中させたというのに苦い顔になった。

「もしかしたら応援しにきてくれたのかも、つてちよつとだけ……ほんのちよつとだけ期待して

ただけどな……」

その姿があまりにもかわいそうだったので、わたしは慌ててフォローを入れる。

「で、でも！ 前半戦で優助がゴールを決めた時は格好よかったわよ！ さすがジェイルハウス



の怪物をひるませた一撃だけはあるわ！」

「そ、そっか……！ さすがに俺が点を入れた時は見ててくれたのか。それだけでも俺はだいぶうれしいぞ！」

優助は少し元氣を取り戻したようだ。

「で、結局、レイカがめずらしく校庭まで来た目的はなんだったんだ？ どうせオカルトがらみだろ？」

わたしのことをオカルトでしか動かない女子だと決めつけていることには反論したくもなるが、実際、オカルト調査の一環でこの場にいるのは事実だった。

「東部小学校の、あるふたりに接触しておこうと思つてね。ひとりはサッカークラブ所属のएस。もうひとりはその幼なじみの女の子。ということは、北部小との交流戦に顔を出せば、ふたりに会うことができるかもと考えたわけ」

「東部小学校のएस……それと、そいつを応援していた女子か。よく知ってるふたりだ。だから試合中、レイカはずつとそいつらばかり見てたつてわけだな」

「……なんで『ずつと』見てたこと知ってるのかしら？」

「試合にもちゃんと集中してたつて！ 言葉のあやだよ！」

そんなやりとりをしていると、わたしたちの前にひとりの男子がやってきた。

「優助。今日はいい試合だったな」

そう声をかけてきたのは、試合の最後にゴールを決めた卓郎君だ。

優助は肩をすくめる。

「やっぱり東部のサッカークラブはいつ戦つても強いよ。最後の最後にゴールを決められるとは思つてなかつた」

ちなみに、交流戦の結果は二対一で東部の勝利だった。

前半戦に優助が頑張つて一点を入れたものの、卓郎君も一点を入れ返して同点。そして、後半戦の最後のゴールで北部小は残念ながら負けてしまった。

東部小学校のサッカークラブはこの碧奥地区で一番強いことで有名だ。優助たち北部小サッカークラブの目標はいつか東部小を倒すことなのだという。

と、そこまでライバル視している相手のことを知らないはずもなく、優助は卓郎君と前からの知り合いらしかった。

「今度は絶対に東部小を倒すからな！ 覚悟してろよ、卓郎！」

「おう！ 楽しみにしてるぞ、優助！」



「話を聞く限り、優助と卓郎君は似た者同士のようだ。ふたりは敵ながらお互いを認め合っているみたいだった。」

「卓郎、そろそろ東部小に戻るって、先生が言ってたよ。帰る準備できてる？」



そう言つて近づいてきたのはさつきの試合中、わたしのとなりで卓郎君を応援していた美香ちゃんだ。

はからずも、わたしが接触したいと思つていたふたりが目の前にそろつてくれた。おまけに優助もいる。

これは最高のタイミングだ。

わたしはようやく、この交流試合に顔を出した目的のため、本格的に動き出す。

「ねえ、卓郎君。美香ちゃん。あなたたち、ひろし君のお友達なのよね？」

「ん？ ああ、そうだけど。そういうえば、北部小つてひろしの通つている学校だったか」

卓郎君は特になんの疑問も抱かずに答えてくれた。だが、優助は身構えるような態勢になる。

なにかを感じ取つたらしい。

美香ちゃんはそんな優助の様子に気づかず、明るく話しかけてきた。

「えつと……レイカちゃん、だよね。もしかしてあなたも、ひろしの変な行動に悩まされてたり

するの？ あいつ、頭はいいやつだけど……すぐひとりで勝手に行動するから、こつちは振り回

されて大変よね」

「そう？ わたしにとっては大事な協力者というイメージなのだけ」

「へ？」

思つていた答えと違つたのか、美香ちゃんはちよつと驚いた表情を見せた。

この辺りが頃合いだろう。

わたしは今日の真の目的に関する話題を切り出す。

「ところで——卓郎君と美香ちゃんは、ひろし君たちと一緒にジェルハウスから脱出した四人のうちのふたりよね？」

卓郎君と美香ちゃんの表情が真剣なものに変わった。

「は？ それ本当なのか、レイカ？ 卓郎たちが？」

わたしは混乱している優助に対してうなづく。

「——つまりはあの怪物について知っている、数少ない小学生よ」

卓郎君と美香ちゃんは顔を見合わせて、困った様子で黙りこむ。少ししてから、卓郎君が口を開いた。

「……怪物のこと、ひろしに聞いたのか？ でも、あいつが怪物に関係することを簡単に話すとは思えない」

「わたしたちにも、いろいろと事情があつてね。ひろし君は最初、怪物のことを隠していたけ

ど、最終的にはわたしと優助に情報を提供してくれたの。彼のおかげで、わたしたちは怪物ホカク作戦をおこなうことができたわ」

「ホカク作戦……？」

美香ちゃんは自分の耳を疑うように聞き返してきた。

「ええ、卓郎君と美香ちゃんも出会ったジェルハウスの怪物。アイツをホカクするため立た作戦よ。……まあ、結果的にはホカクすることはできなくて、仕方なく倒してしまっただけど」

「倒した!? あの怪物を!? ……いや、冗談を言うな。いくら優助の友達でも許せる冗談と許せない冗談がある」

卓郎君は厳しい視線をわたしに向けてきた。ちよつぱり険悪なムードになったところに、優助が焦ったように割つて入ってくる。

「まあまあ! みんな落ち着けよ。卓郎、美香ちゃん、レイカはオカルト現象がすごく好きなんだ。だから、あの青くてデカくて、筋肉質で鋭いキバがたくさん生えた怪物のことを噂で聞いて、倒す妄想をしていただけで——」

そうやって、なんとかごまかそうとした優助だったか。

「優助君、なんでそこまでアイツの特徴を細かく知ってるわけ？」

「は……あつ、しまった！」

美香ちゃんに一瞬で嘘を見破られてしまった。

「……優助、お前も見たんだな」

「今さら見てないって言っても、信じてくれない、よな？」

「そうだな……」

卓郎君は長く息を吐いて、わたしのほうを見た。

「レイカ、だったよな。お前と優助がああ怪物を倒したって言葉、まだ信じられないが、冗談だと決めつけたことは謝るよ」

不安げな表情の美香ちゃんはうつむく。

「でも、あたしたち以外にもアイツらと出会った人たちがいたんだ……。じゃあ、この碧奥地区にはあと何体の怪物がいるの？」

わたしはその言葉を聞きのがさない。

「ちよつと待って。あなたたちはジェイルハウス以外の場所でも、あのブルーベリー色の怪物に遭遇しているの？」

わたしの情報では、卓郎君、美香ちゃんが遭遇した怪物は Jewel House にいた一体だけのはずだ。

それにしても、言い方がおかしい。

美香ちゃんの言い方はまるで、すでにもう何体かの怪物と遭遇しているかのようだ。

「……まだ、そこまではひろしから聞いていないんだな？」

卓郎君は確かめるようにたずねてくる。

「ええ。ここところ、わたしはひとりで怪物に関する情報を集めていたから、ひろし君とは会っていないわ」

わたしのオカルト専門の鋭い勘が、卓郎君の振るまいからなにかを感じ取る。

「もしかして、他にもなにかあったの？ 怪物に関係する情報なら、ぜひ教えてもらいたいわ。

残念ながら、わたしが手に入れた情報はすべてただの噂ばかりで、なかなか信頼性の高い情報に辿り着けないのよ……」

「そりゃ、探してもなかなか見つからないだろうな。こんな話を広めたら、危険な目にあうやつが増えるだけだ。もし、他に怪物に遭遇したやつがいても同じように考えるだろう。だから俺たちも、この話は絶対誰にも話さないと決めていたんだが——」



卓郎君はそこで言葉を区切り、美香ちゃんと目を合わせてうなずきあう。

「——レイカちゃんたちがあたしたちと同じで、怪物に襲われたことがあるなら、言っておいたほうがいいと思うよ。卓郎」

美香ちゃんのその言葉を受けて、卓郎君は話し出す。

「俺たち……つまり俺、美香、ひろし、たけし、タケルは『ジェイルハウス』、『碧奥小学校』、『碧奥医院』の三か所ですであの怪物と出会っている」

それは驚きの情報だった。

わたしがどんなに調べても、なかなか情報を得られないブルーベリー色の怪物。それにもう三回も遭遇しているなんて。

「レイカ、目が輝いてるぞ……」

優助のあきれた声も聞こえないふりをして、わたしは卓郎君に素早く詰め寄り、早口で質問を投げかける。

「それはすべて別の個体だった？ もし別の個体だと仮定した場合、それぞれに個体差は存在した？ 出現場所の共通条件に心当たりは？ 怪物に遭遇した後、あなたたちは逃げたの？ それとも倒したのかしら？」

「こ、個体差？ きよ、共通条件??」

卓郎君は面食らったように目を白黒させ、優助に視線を送る。

「レイカ、オカルトスイッチが入ってるぞ。それ、知らない相手の前でやると、絶対に引かれるから気をつけような」

困った様子の卓郎君とは逆に、「いつものことだ……」と優助はため息をつき、わたしを卓郎君から引き離す。

「あーっ、まだ聞きたいことがいっぱいあるのに！」

「なんだかあの怪物の話で、ひろしとレイカちゃんが意気投合した理由が少しわかった気がする……」

美香ちゃんはなにかに納得したように言った。いったいなにを納得したのだろうか？

「それにしても、三回もあの怪物に会ったなんて……。卓郎たち、よく助かったな」

「実際問題として、ひろしと……。あとは、タケルがいたことが大きかったな。あいつらがいなかったら、たぶん今ごろ、怪物に食べられてたさ」

「タケル君——ひろし君と一緒にいた、あの白い犬の子ね。あの子がわたしたちのことを心配して吠えてくれなかったら、わたしたちも危なかったのよね……。今度、お礼を言わないといけな

いわ

「あれ？ レイカちゃんもタケルに会ったことあるの？」

美香ちゃんが不思議そうに首をかしげた。

「ええ。ひろし君の尾行をしてた時に、彼がタケル君の家を頻繁に訪れることを知ってね。優助と一緒に突撃したの」

「び、尾行……？」

美香ちゃんがわたしの発言に明らかに引く。さすがにまずいと思つたタイミングで優助が話をそらすように言つた。

「あー、そう言えば、あの怪物は犬が苦手なんだつたよな。スピーカーから流したタケルの吠える声であるの混乱ぶりだ。本物の犬がその場にいたら、すぐに逃げ出しそうだ」

「スピーカー？」

「俺とレイカが怪物と戦つた時、仕掛けたトラップの一つにそういうのがあつてさ。あらかじめ録音しておいたタケルの吠える声を、スピーカーから流して撃退したんだよ」

話がそれたところで、わたしは会話を再び交ざる。

「でも、卓郎君たちのおかげであるの怪物が一体だけじゃないことがわかつたわね。これは大きな

収獲しゅうかくだわ」

「……俺おれたちがあんまり言いえた話はなじやないが、できるだけ、あの怪物かいぶつとは関かわらないようにするべきだと思おもう」

卓郎君たくろうくんは真面目まじめな顔かおで言いう。

それに同意どういするように美香みかちゃんが続つづける。

「あたしも同じ考かんがえ。自分じぶんたちから探さがしにいくなんて、絶対ぜったいにやめたほうがいいよ——」

そこで少すこしだけうつぶいた美香みかちゃんは、小ちひさな声こゑでぼつりとつぶやく。

「——死しにたくなかったら」

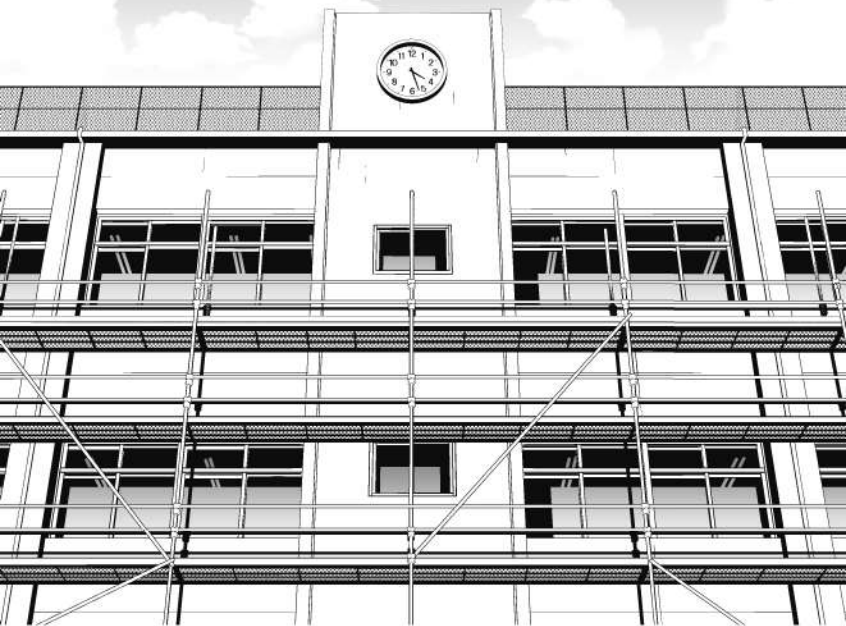
その言葉ことばはわたしに、ジェイルハウスでの危あぶなかつた場面ばめんをいくつも思おもい返かえさせた。

あの怪物かいぶつの太ふと腕うでで殴なぐられた時ときは一時的いちじてきに意識いしきを失うしなってしまったし、身体からだをわしづかみにされ、口くちの中に放ほうりこまれそうになつた時ときは本ほん当とうに死しを覚かく悟ごした。

それでも、わたしは——。

「……………」

わたしが黙だまりこんだことを「了承りょうじやう」と取とつたのか、卓郎君たくろうくんと美香みかちゃんは怪物かいぶつの話はなをそれ以上いじょう続つづけなかつた。



東部小サッカークラブの他のチームメイトたちも帰る準備が整ったようだ。

「せっかくだし、校門まで送っていくよ」

そう提案した優助を先頭にする形で、わたしは卓郎君たちと一緒に校門を目指して歩きはじめた。

校門までの間には北部小の校舎がある。卓郎君はそこに広がった光景が珍しかったのか、指をさして興味深そうに言った。

「あれ、すごいな！ のぼってみたいかなぜ」

「ん、ああ。今年の夏休みの間はずっとあんな感じなんだよ。二学期が始まるまでに終わらせるみたいだけど」

優助が返答する。

ふたりが見ているのは、校舎の外壁を囲うように築かれた巨大な鉄の足場だった。児童が少ない夏休みの間に、外壁の塗装作業——つまり、壁をきれいにするための工事をおこなおうとしているらしく、ここしばらくあんな状態が続いている。

足場は一見、アスレチックにも見えるような複雑な構造になっていて、クラブ活動などで夏休み中に学校を訪れる男子たちは、卓郎君と同じでみんなのぼりたそうにしている。

だが、工事現場はかなり危険だ。

先生たちからは絶対に近づいてはいけないと嚴重に釘を刺されている。

事実、地上の足場出入口のところは子どもが入れないようにしっかりと大きな鉄製のドアで封鎖されていた。

工事用の巨大な足場について話しているうちに、わたしたちは校門の前まで到着していた。

「今日はありがとう。卓郎、美香ちゃん。次の試合では絶対、東部小サッカークラブには負けないからな！」

優助は最後まで笑顔を崩さず、卓郎君や美香ちゃん、東部小学校の面々を見送った。

——そして、彼らの姿が見えなくなった後。

振り返った優助の表情は真剣そのものだった。

「レイカ。他人の前ではもうちよつとそのオカルト好きの本性を隠せないか？」

やばい、これは怒られるパターンだ――。

と、わたしが背中を向けて全速力で逃げ出そうと思つた時。

「――でも、今のはかなり有力な情報だった」

予想とは違う言葉が優助の口から出て、わたしは逃げることを忘れてしまった。

優助の表情に怒りはなく、真面目な顔で続ける。

「オカルトなんてものにも、怪物なんてものにも、俺はあまり関わりたくない。だけど、あのブルーベリー色の怪物が複数いるっていう話が本当なら、俺はそれを放置しようとも思わない」

「優助、それって……」

「このまま放つておいて、誰かがあの怪物に食べられるようなことにはなつてほしくないってことだよ。レイカが怪物に食べられそうになつた時、俺はとても怖かつた。大事な幼なじみを失うなんて考えられなかつた。だから、他の人にもそんな思いはしてほしくない」

「ついに優助が本格的な仲間……!」

「あ、でも。オカルト調査クラブには入らないからな。俺はあくまでサッカークラブのメンバーだから」

「そこは絶対に断るのね……。それにしても、わたし、卓郎君に説得された後、突然黙つちやつたでしょ？ それを見て、今回はさすがに怪物調査をあきらめちやつたのかも、とか思わなかつたの？」

「それだけは、ない」

断言されてしまった。

いや、その通りではあるんだけどね……。

優助はいつものように見透かした視線で言う。

「どうせレイカのことだから、卓郎たちからあれ以上新しい情報は引き出せないと判断して、怪物の話題をやめたただけだろ？ それにあのまま悪い雰囲気になったら、今後新しい情報を教えてもらうことも難しくなるだろうからな」

「さ、さすがが幼なじみ……」

優助の言ったことはすべて正解だった。完全に考えを見抜かれている。

怪物と遭遇した経験を持つ卓郎君と美香ちゃん、あのふたりと仲が悪くなるのは今後のためにも良くないと思つた。

彼らはなぜか怪物と頻繁に遭遇している。ということは待つていれば、またなにか興味深い話



が聞けるかもしれない。

そのためには、今はいい関係を保つておくことが大事だった。

だから今回は、引き下がることにしたのだが……。

……優助にはこれから隠しごととはできなさそうだ。

## 2 忘れてしまったメモ

「状況を整理しましょう。ジェイルハウスの一件以来、わたしたちはあのブルーベリー色の怪物に関する本物の情報を得られていなかったわ」

北部小学校、二階の端の空き教室。

オカルト調査クラブの部室として、先生に無断で使用しているその教室には、だんだんと愛着がわきはじめている。

わたしと優助は交流試合の後、少ししてからこの部室へとやってきていた。

もちろん、複数体存在すると確定したブルーベリー色の怪物についての情報を、しっかりと整理するためだ。

「卓郎君は言っていたわよね。彼らが怪物と遭遇した場所は、『ジェイルハウス』、『碧奥小学校』、『碧奥医院』の三か所だつて。優助と合流するまでに図書室のパソコンでざっと調べてみた結果がこれ」

北部小のサッカークラブが校庭の整備をしている間に、軽く調べておいた情報とわたしの見解

を書きこんだメモを優助に渡す。

『碧奥小学校』は二十年前に突然閉鎖された廃校で、『碧奥医院』は数日前に火災騒ぎがあつた場所か。どつちもいわくつきだな」

「ただこれだけじゃ、あの怪物がどんな場所を好むかまではわからないのよ。ひとけのない場所、とも考えたけど、碧奥医院は当てはまらないし……。一応、噂レベルでは、碧奥医院には隠された地下病棟があつたという話もあるけど……その辺は今度、ひろし君に会つたら、ちゃんと確認しなきゃね」

優助はメモを見ながら、うーんとうなる。

「あの怪物つてさ、移動したりはしないのかな？ ジェイルハウスにしても、その他の場所にしても、ずっと一か所にとどまつてる感じがするよな」

「たしかにそうね。これからはそういうひとけの少ない閉鎖された施設を重点的に調査するのがいいかも」

わたしは部室の隅の棚に置いてある空きビンに視線を移す。

そのビンの中には、ジェイルハウスで回収した青い虫の死骸があつた。

「あの虫についての話題は出なかつたわね。ひろし君には伝えたけれど——卓郎君たちは知らな

いのかしら？」

「青い虫と、怪物の関連性はまだはつきりしたわけじゃないから、ひろしは卓郎たちにまだ伝えてないのかもしれないな。不確定な情報でみんなを混乱させても仕方がないし」

「それもそうね……」

「手に入れた新しい情報はこんなところか。今日はここにいても、これ以上の進展はなさそうだな。しばらくは情報収集の日々が続きそうだ」

「そう言って援助は窓の外を眺める。」

「……ん？ ずいぶん暗いな」

「空一面を分厚い灰色の雲が覆っていた。」

「ああ。今日は夜ごろから、今年一番の大雨が降るって天気予報で見たわ」

「そういえば、そんなことテレビで言ってたよう……。交流試合の時間帯の天気ばかり気にして、あんまりちゃんと聞いてなかったけど」



「かなり激しい雨になるみたい。思っていたよりも早く雲が多くなってきたし、雨が降ってくる前に帰りましようか」

わたしは机の上に広げていたオカルト本をかき集めるとバッグの中に入れる。

そして、待たせてくれていた優助と共に空き教室を出た。

……この時、もう少しちゃんと忘れ物を確認しておくべきだったと、のちのわたしは思うことになる。

「——ない!!」

それは優助と別れ、家に帰ってからのことだった。

自分の部屋でバッグの中身を取り出したわたしは、空き教室にある物を忘れてしまったことに気づいた。

それはよりによって、ブルーベリー色の怪物の出現場所をまとめた、あのメモ。

メモ以外の荷物が大きな資料本ばかりだったので、そつちに気を取られていて、バッグに入れ忘れたことに気づけなかった。

教室を出る時に机の上は確認したけど、メモはなかったはずだ。ということ、片づけの最中に床にでも落としてしまったのだろう。

あのメモには単に怪物が出現した場所が書いてあるだけではなく、わたしの怪物に関する考察も一緒に書きこんである。

ただの忘れ物なら明日の朝にでも取りにいけばいい。

だが、あのメモを誰かが拾って興味本位で怪物の出現場所を訪れたりしたら、大変なことになるかもしれない。

そもそも部室で落としたと思っっているけれど、それ自体にも確証がないし、廊下にも落としていけば、それこそ一刻も早く回収する必要がある。

となる。

「……取りにくいしかないか」

勉強机の上に置かれた時計を確認する。

家に帰ってから少し時間が経っていた。

もうすぐ七時になるうとしている。

窓の外を見ると、この時間はただでさえ暗いのに、空を覆う厚い雲のせいで、いつもよりも深

い闇が広がっていた。

まだ勢いは弱いですが、雨も降りはじめている。

オカルトは好きだが、夜の学校の雰囲気はわたしでも怖い。一人では心細いというのが正直なところだ。

「うむむ、仕方ない……」

あまり気が進まなかったが、わたしはベッドに置いてあったスマホを手にとった。そして、登録してある連絡先の一つに電話をかける。

数度の呼び出し音。

その後、さつきまで一緒だった幼なじみが出た。

『どうした、レイカ？』

優助の声だ。

実はジェルハウスの事件の後、スマホの重要性に気づいた優助は、親に頼みこんで自分専用のスマホを買ってもらったのだった。

『完全防水』なんだぜ！ と何度も自慢されたので忘れようもない。

ちなみに、わたしのスマホは完全防水ではない。

だからこそ、優助は自慢してくるのだが、そろそろわたしが面倒くさく思っていることに気づいてほしいところだ。

と、話の本題はそこではない。

「あの、優助……。ちよつとだけ、お願いがあるんだけどー」  
わたしは少し甘えるような声を出してみるが、

『——なんかいやな予感がする』

「なんでよ!？」

すぐに優助が警戒した様子になって、わたしは思わず叫んでしまった。

「わたしがせっかく可愛らしくお願いしようとしているのに警戒されるなんて、なんだか腹立たしいわ!」

『レイカがそういう態度を取る時は、絶対に面倒なことに巻き込まれるって、もう身体が理解してるんだよ』

優助の言葉からはなんだか悲しさがただよってきた。

……今度からはお願いの仕方めちゃんと考えなければ。

とにかく今回はもうすでに警戒されてしまったのだから、もう無理に可愛く振るまう必要など



ない。

わたしはさつきと用件を切り出すことにした。

「あのね？ 実はさつき部室で見せたブルーベリー色の怪物に関するメモ、学校に忘れてきちゃつたみたいなの」

『あ、そうなのか。じゃあ、明日にでも取りに——』

「——今から取りにいきたくないんだけど……ついてきてくれない？」

『いやいや！ もう外は真つ暗だぞ？ 今日じやなきやダメなのか？』

「万が一、誰か他の子があのメモを見つけて、興味本位で現場に行つちやつたりしたら、危ないと思わない？ あとは先生に拾われて、妙なことを調べるんじゃない！ つて怒られたりするの  
もいやだし」

『あのメモ拾つても、誰が書いたかわからないんじゃない？』

「……あー。ちよつとカッコつけて、執筆者レイカつてサイン風に書いちゃつたのよ、メモの端  
つこに」

『うわあ』

電話の向こうであきれた優助の声をする。

「ということ、優助にはわたしと一緒にきてほしいの。ダメ？ 夜の校舎つてけっこう怖いと思ふのよ……」

『はあー。しょうがないな。わかつたよ、じゃあ十分後にレイカの家まで迎えに行くから準備しておいてくれ』

やはり、優助は頼りになる幼なじみだ。なんだかんだと文句を言つても、わたしのことをいつも助けてくれる。

「ありがと！ 優助」

『はいはい。それじゃあ、カッパと懐中電灯の用意を忘れないようにな』

「へ？」

想定外の道具の名前が並んで、わたしは思わず首をかしげた。

『ん、どうした？』

「カッパはいいとして、なんで懐中電灯……？」

『そりやそうだろ』

と、優助は言葉を一度区切つて。

わたしがまるで予想していなかったことを口にした。

『学校には誰かしら先生がいるだろうけど、「忘れ物しました」って言って、空き教室に行ったらオカルト調査クラブが勝手に使っていることがバレるだろ?』

「あ、たしかに!」

『となれば、残された方法は一つ——潜入だ』